

ロールシャッハ法と精神分析

— 継起分析と防衛解釈を中心に —

中野 明 徳

はじめに

臨床心理査定的基本的方法に、面接、行動観察、心理検査の三つがある。心理検査法は人格検査と知能検査に大別でき、人格検査のうち、ロールシャッハ法は投影法の代表として広く知られている。ロールシャッハ法は、スイスの精神科医ヘルマン・ロールシャッハ (Hermann Rorschach, 1884-1922) が、『精神診断学—知覚診断的実験の方法と結果』(1921)の中で公表したもので、10枚のインクのしみに対し何に見えるか自由に連想させて、被検者がどこに (反応領域)、どのように知覚するのか (反応決定因)、何を知覚するのか (反応内容) という観点から人格を捉える。Rorschachは、チューリッヒ大学教授プロイラー (Bleuler, E.) の指導で学位論文「反射幻覚とその類似現象について」(1912年) を完成させたが (Bash, 1965)、この検査によって統合失調症を他の疾患から鑑別できることを示した。

ロールシャッハ法が今日でも精神科臨床で広く使われているのは、被検者の意識されていない深層心理を把握できること、投影法としては反応を数量化しやすいこと、人格特性や人格構造のみならず、病態水準までも把握できるなどが挙げられる。とはいえ、ロールシャッハ法は質問法と違って、初心者には解釈が相当に難しいという問題を抱える。ラーナー (Lerner, P, 1998) は、ロールシャッハ法の二つのアプローチについてあげている。実証的アプローチは、近年のアメリカで、エクサー (Exner, 1991, 2000) が開発した包括システムがその代表である。もう一つの精神分析的アプローチは、精神分析の概念や公式をロール

シャッハ理論と解釈に適用するもので、これはラパポート (Rapaportら, 1968) の流れを汲み、継起分析 (sequence analysis) はその代表である。継起分析とは、馬場 (1999) によれば、被検者の体験過程、葛藤解決過程、表象過程を、ロールシャッハ反応の変遷過程の中で捉えることによって、パーソナリティを力動的に理解することである。しかしこれは経験の乏しい初心者にはかなり難しい。

本論文では、夭折したRorschachがこのテストに何を求めていたことを示すと同時に、精神分析的アプローチの中心である継起分析とそのための防衛解釈に関する基本的な考えを呈示したい。

ヘルマン・ロールシャッハの謎と夢

Rorschachの『精神診断学』が出版されたのが1921年9月であったが、彼はわずかその9カ月後の1921年4月2日に急性腹膜炎のために弱冠37歳でこの世を去った。この本は、彼が他界するまでに、たった2, 3冊しか売れなかったという。Rorschachがこのテストを思いつき、この本を出版するまでの経過に関して、Exner (2003) の興味深い講演がある。Rorschachはフロイト (Freud, S.) とは対照的に、このクレクソグラフィ (Klecksographie) の研究にわずか4年間しか研究できず、多くの謎を残したが、逆に後継者に自由な研究を許した人でもある。Exnerは彼のミステリーについて、次のような点を指摘している。

①Rorschach自身の概念や意図が必ずしも明確でなく、彼の研究の基礎となる概念的あるいは理

論的枠組みが必ずしも十分でなかった。

②Rorschachは実験のために少なくとも40枚のインクプロットを作成しており、1918年から1919年初頭にかけては15枚の図版を用い、それらの所見を見直した後、12枚に減らした。しかし、出版社の都合でさらに2枚が削られ、それまで蓄積してきた所見が10枚のカードでも裏づけられるようにデータを調べ直さなければならなかった。彼の落胆と憤慨は察するに余りある。

謎①はRorschachがこのテストでいったい何を意図したかである。Rorschachが学位論文を完成させた前年に、彼を指導したBleuler (1911) の大著『早発性痴呆または統合失調群』が刊行されている。Bleulerはクレペリン (Kraepelin) が早発性痴呆 (Dementia praecox) とした疾患群を統合失調症 (Schizophrenie) として命名したことで有名である。この統合失調症という概念は、当時の精神医学界に大きな影響を与えると同時に、何らかの器質的影響で生じる他の精神病とどのようにして鑑別するかは大きな関心事であった。精神病院ではたらく精神科医であるRorschachの第一の関心事もここにあったことは想像に難くない。彼の『精神診断学』をみると、被検者の総数が405名であり、そのうち統合失調症患者は188名と最大であることから肯げられる。

Rorschach (1921) によれば、ほとんどの被検者がこのテストを「空想力の検査」とみなしたが、無作為の形の解釈は空想力とは関係がなく可能であることから、このテストでの解釈(つまり反応)は知覚や統覚の概念に属すとみなした。知覚とは現存するエングラム(記憶心像)を新しい感覚複合体に連合的に同化(連合)させることであると定義している。解釈はこの同化をしようとする仕事を意識しているような大きな知覚であり、言い換えれば、感覚複合体とエングラムの間の不十分な相似性を心の中で知覚することであるという。この意味で被検者のすべての反応が解釈というわけではなく、健常者の範囲にある被検者は自発的に絵柄の解釈を口にするが、大部分の器質精神病患者や多くの統合失調症患者は同化の仕事を知覚せ

ずに、絵柄を決めつける。こうしたことから、Rorschachはこのテストを「知覚の検査」と呼ぶことに正当性があるとした。ここからは、Bleulerの影響下にあつて、統合失調症の、とりわけ思考障害(連合弛緩)の研究という意図を読み取ることができるであろう。

とはいえ、Rorschachは精神分析にも多大な関心があつた。Bleuler (1911) が統合失調症の研究の中で、「クレペリンの病理学に追加した私の努力の主要部分は、フロイトの思想を早発性痴呆に適用したものにほかならない」と述べるほど、当時のスイスには精神分析に対する関心があつたとみられる。現にBleulerの助手であつたユング (Jung, C.G.) が一時期(1907年から1912年まで)、Freud, S. に接近したことは周知の事実である。Rorschachの体験型 (Erlebnistypus) の概念はJungの影響が見て取れるし、Rorschachは1919年に設立された新スイス精神分析協会の副会長に選ばれている。

Rorschachの『精神診断学』の中に、「当実験と精神分析」というわずか2頁足らずの節があり、その中でつぎのような記載がある。「このテストで無意識内容を明らかにするのは問題外である。しかし、神経症と潜在性ないしは顕在性の統合失調症との鑑別を可能にすること、分析の予後の可能性を示してくれること、神経症の発生に関する推論(特に昇華活動)を示唆する。分析の前後で所見を比較すると、体験型の変化、人格の変化が見て取れるし、体験型とFreudのいう早期固着の再活性化に至る退行との間には関係があるかもしれない」とある。

Rorschachの死後に公表された「形態解釈実験の活用」(Rorschach, 1921) という論文では、平凡反応と濃淡反応を導入した後、以前よりも数倍の量で、このテストと精神分析とのより深い結びつきを示している。その例をあげてみよう。「運動反応や色彩反応は形態反応よりも無意識的なものと近い関係にあり、独創反応は平凡反応よりも精神的にみて重要である。運動反応は夢の解釈の際の顕在的な夢内容と同じくらい重要で、深

い無意識に属しており、被検者の無意識的傾向、根本的な予期態度を明らかにし、これは精神分析から裏づけられている。色彩反応は夢の象徴に相当する象徴であり、無意識においては別のものを意味しているが、潜在内容についての強力な情動関係を明らかにする。形態反応は「おおむねコンプレックスから自由である」等々。

このように、Rorschachは当初の統合失調症研究からさらに一歩すすめており、彼の精神分析に対する関心が並々ならぬものであった。もしRorschachがもう少し長生きしたならば、このテストにもっと精神分析的アプローチを取ったに違いない。これがヘルマンの夢であろう。

謎②は図版に関するミステリーである。エランベルジュ (Ellenberger, 1981) によれば、原ロールシャッハ図版15枚のうち現存しているのは2枚にすぎず、現在の図版は、出版社によってサイズが小さくさせられ、しかも周囲の黒枠が取り去られたことがわかっている。中井久夫 (1997) は、図版がどのようにして作られたのか、そしてあの順序でなければならぬのかについて、並々ならぬ関心を寄せている。ドイツのロマン派医師兼詩人ユスティヌス・ケルナー (1786-1862) が晩年、幼い頃に行ったインクプロットを再び作り、そこに詩を書き加えたように (Ellenberger, 1981)、中井も現存の10枚のカードに思いをよせ、この絵柄はロールシャッハ以外誰もがつくれぬ「神にえらばれた十枚」とまでロールシャッハの美学を讃えている。第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ図版は「起承」、第Ⅳ図版が「転」、第Ⅴ図版が「結」であると同時に後半を準備して、第Ⅵ図版は第Ⅰ、Ⅳを継承し、第Ⅶ図版は第Ⅱ、Ⅲを継承し、第ⅧとⅨ図版はペアをなして、第Ⅹ図版は色彩の第三番目の図版という位置と全体の締めくくりという意味をもち、ロールシャッハ・カードはあの順番でなければ遂行できないと言い切る。Rorschachの意図は謎であるが、彼の天与の才能が10枚のカードの流れを分析していく継起分析の醍醐味を私たちに与えてくれたことは確かである。

ロールシャッハ法への二つのアプローチ

Rorschachの死後、このテストは先輩のオーバーホルツァー (Oberholzer) に支持され、彼はレヴィ (Levy, D.M.) を教育し、さらにLevyはアメリカにロールシャッハ法をもたらした (1925年)。こうして1930~1940代にアメリカでは5つの学派、すなわち、ベック (Beck, S.J.)、クロッパ (Klopfer, B.)、ハーツ (Hertz, M.)、ピオトロスキー (Piotrowski, Z.)、ラパポート (Rapaport, D.) とシェイファー (Shafer, R) のグループが生まれた。彼らはいずれもロールシャッハとは直接的な交際経験がなく、それぞれロールシャッハ・システムを開発した。ちなみに「投影法」という呼称は、Frank (1939) による (Exner, 1969)。

各システムの特徴に多大な関心を寄せたExner (1969) の見解によって、各システムのもつアプローチの特徴を図示すれば、図1のとおりで、Beckのシステムは最右翼、KlopferとRapaport-Schaferのシステムは最左翼になり、PiotrowskiはBeckと大差なく、Hertzは中央の左よりに位置づけられる。ExnerはBeck法に基礎を置いて既存のシステムを包含し、かつコンピューターを活用して、多量のデータに基づいて包括システムを開発している。Exner法こそ現代における最右翼のシステムといえよう。

なお、日本ではこれまでKlopfer法に準拠した片口法 (片口, 1987) が最も普及しているが、1994年に「包括システムによる日本ロールシャッハ学会」が発足し、若いロールシャッカーの間ではエクスター法が普及しつつある。

実証的アプローチと精神分析的アプローチについて、Lerner, P. (1998) を参考にして整理したのが表1である。実証的アプローチは心理測定志向が強く、多量のデータ使って統計的な妥当性を重視する。つまり、客観的な普遍性を求める法則定立的 (nomothetic) な方法が重んじられる。

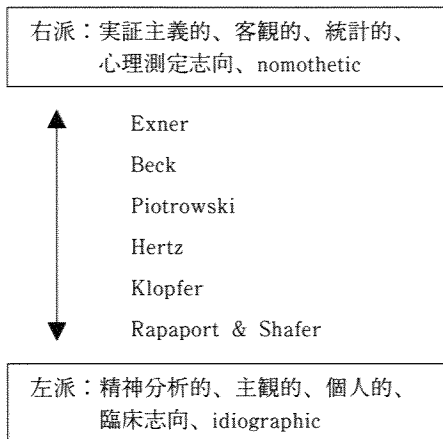


図1. 各ロールシャッハ・システムの位置

また、ロールシャッハ法はそれ自体人格検査で

あるから、他の理論を適用するよりもロールシャッハ独自の人格理論を探求しようとするが、いまのところRorschachが概念化した「体験型」以上のものはでていないように思われる。

他方、精神分析的アプローチは精神分析的理論を背景にした臨床志向が強く、被検者個人の世界を明らかにしようとするもので、臨床的な妥当性を重視する。言い換えれば、事例研究のように、個性記述的 (idiographic) な方法を取る。

もちろん二つのアプローチが排他的にあるのではなく、相補的であればならない。精神分析的アプローチをとる者は、形式な分析は無視してはならないし、実証的アプローチを取る者は反応継起にも目を向けると、豊かな所見を生むであろう。

表1. ロールシャッハ法への実証的アプローチと精神分析的アプローチ (Lerner, 1998)

| | 実証的アプローチ | 精神分析的アプローチ |
|-----------|---|--|
| 基本的観点 | 心理測定志向 (検査中心) | 臨床的な査定志向 (人間中心) |
| 情報源 | Exner: ①構造一覧表 (これが中心) ②スコアの継列 ③言語表現 | ①テスト・スコアとそれらの相互関係など、反応の形式的側面 ②被検者固有の反応内容とそれらに対する被検者の態度 ③反応継起 ④査定中の被検者の行動 ⑤被検者-検査者関係の特徴 |
| 検査の理論的根拠 | 心理測定に焦点を合わせて、実証的に研究結果を連結する | Rapaport: 思考過程と人格構造を媒介する過程を明らかにした |
| テスト・バッテリー | Exner: 被検者の問題に応じて検査を組み合わせる | 標準的なテスト・バッテリーを使用 (Rapaportの構造水準の概念による) |
| 人格理論の役割 | 人格理論に左右されない | 理論なしではロールシャッハの推論は意味も実質も臨床的適合性もない |

解釈の二つのアプローチ

Lerner (1998) は、相補的なロールシャッハ解釈の二つのアプローチについて述べ、一つを構造的 (structural)、他方を体験的 (experiential) と

呼ぶ。ここでいう解釈は検査者がこのテストからどのような読みとりをするかという意味である。

構造的アプローチは、検査反応を反応領域、反応決定因、反応内容に分けてコードされたスコアと、それらの相互関係の特徴を抽出するものであ

る。この代表にRorschach自身の「体験型」の概念があるが(表2)、これを導入する際に彼は「われわれは被検者が何を体験するかは知らないが、彼がいかに体験するかは知ることができる」と述べている。この考えが構造的アプローチの基礎にあり、Exner法はこれを推し進めたといえる。

表2 体験型 (Rorschach, 1921)

| 運動反応優位(内向型) | 色彩反応優位(外拡型) |
|---------------|--------------|
| 分化した知能 | 紋切型化した知能 |
| 独自の生産性 | 再生産性 |
| 内に向かう生き方 | 外に向かう生き方 |
| 安定した情動性 | 変動しやすい情動性 |
| 現実への順応の弱さ | 現実への順応の豊かさ |
| 集中的な関係能力 | 拡張的な関係能力 |
| 落ち着いた、安定した運動性 | 興奮した、不安的な運動性 |
| ぎこちなさと不器用さ | 巧妙さと器用さ |

スコアやサインの意味づけに頼ることができれば初心者には魅力的であるが、スコアの意味を盲目的に採用することは危険でもある。例をあげると、エクスナー法にはうつ病指標 (DEPI) や統合失調症指標 (SCZI) という臨床指標があり (Exner, 1991)、筆者らはこの指標を日本人の精神科患者に適用したことがある。その結果、DEPIは85%という高率でうつ病を同定するとされているが、筆者ら (津川ら、1997) の日本人の場合、DEPIは大うつ病をほとんど同定せず、偽陰性率は81%であった。統合失調症指標 (SCZI) の場合、Exnerのアメリカでの陽性率が80%に対して、筆者ら (笠井ら、1998) のデータでは該当した者は49%であった。このように、ロールシャッハ・テストはうつ病よりも統合失調症の鑑別に敏感であるが、それでも日米の差が大きい。Exner法を単純に日本に持ち込むわけにいかず、社会文化的背景を無視できない。現在、SCZIは「知覚と思考の指標」(Perceptual-Thinking Index: PTI) と修正されている (Exner, 2000)。

Exner (2001) は検査反応過程を図2のように、

「これは何に見えますか」という教示によって、走査 (scanning)、刺激の取り入れ (coding)、分類 (classifying)、比較 (comparing)、捨てる (discarding)、選択する (selecting) といった、一連の認知的操作が引き起こされると説明する。反応過程は3つの段階として考えられ、第I段階は情報処理過程 (領域やZスコアに示される)、第II段階は認知的媒介過程 (形態水準や平凡反応と関連)、第III段階は思考過程 (M反応や特殊スコアと関連) に相当する (Exner, 2000)。

他方、**体験的アプローチ**はロールシャッハ・プロトコルにおける構造的な見地だけでは説明できない体験的側面に対して追体験や共感していくことである。被検者の内的経験を取り上げて、その意識の中に存在し生起するものを描き出ことであり、言い換えれば、「なぜ見えたのか」よりも「どのように見たのか」という体験を重視する立場で、これを**現象学**という。

シャハテル (Schachtel, 1966) は、現象学と精神分析学の考えによって、体験的アプローチを進めた。このアプローチは、テスト中に被検者が体験する事柄、特にテスト状況との関連において、見慣れないインクプロットに接近あるいは回避しながら、課題を処理する仕方を再構成し、理解し、明確にする方法である。また、「体験とは外界の知覚と内面生活との融和である」と述べる。インクプロットの対称性は全体を意味づけることを促進するばかりか、プロットとの無意識的な同一視を可能にし、体験は意識的なものと無意識的なものの両方を含むことになる。

精神分析理論の支柱に夢理論があり、図3のように、ロールシャッハ反応過程をFreud (1900) の夢理論との類似で示した。インク図版は、いわば無意識を託すための日中残滓 (昼間の残り物) に相当するであろう。図版が予め決められているので、反応は夢のような多様性や自由度はなく、この意味で夢よりも推測が容易である。中井 (1997) はロールシャッハ過程と夢過程を比較して、夢はノンレム期によって中断されるが、ロールシャッハ過程は10枚のカードによって必ず中断

されると指摘する。このことは、ロールシャッハ過程では恐ろしい悪夢のようにならず、**自我が退行 (regression) と進展 (progression) を繰り返す状態を呈示することを意味する**。また、ロー

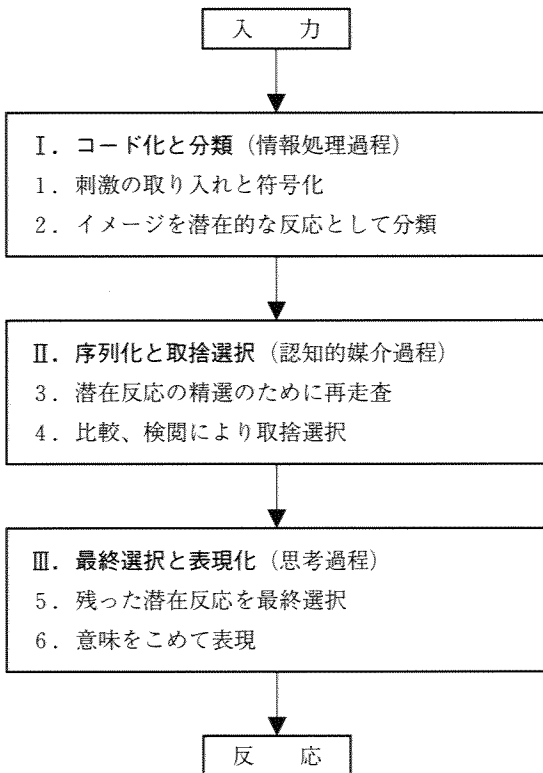


図2. ロールシャッハ反応過程と操作 (Exner)

継起分析

継起分析 (sequence analysis) は、日本ではこれまで継列分析と訳されてきたが (片口, 1987)、馬場 (1999) は日本語に「継列」という言葉はないし、連続的に起こるといふ原語の意味からして「継起」の方がふさわしいとしている。

継起に関しては、Rorschach (1921) 自身が反応様式の継起 (把握型) に注目しており、Schachtel (1966) も反応領域に限定した継起分析を展開している。Klopferら (1962) は、継起分析について、カードからカードへ、反応から反

ルシャッハ過程は前意識に湧き出る多数の似たものから選んで言語化する「パラダイグマティックな」過程であり、逆にいえば、すでに無意識に存在するものを解釈する過程でもある。

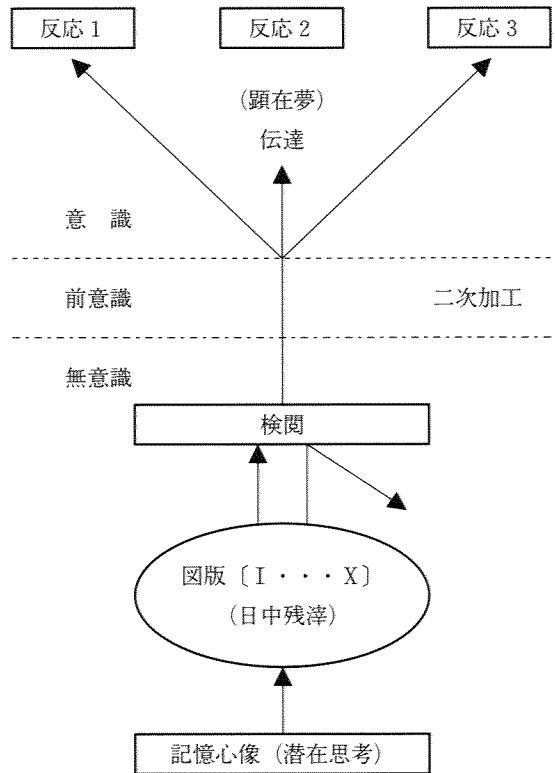


図3. ロールシャッハ作業 (夢理論)

応への過程の分析であると指摘しているが、全般的な方法は容易に記述しがたいと述べて、ごく簡単に一般的な形式面を強調するにすぎない。Piotrowski (1957) は、反応の流れに対するショック (一時的な連想力や知覚の麻痺) に関心があり、時間の計測を好ましいとする。反応時間の計測をやめたExner法は、構造一覧表にスコアの継起を含めているが、形式的分析に限定される。

継起分析の広範なアプローチは、Rapaportのモデルをさらに発展させたSchafer (1954) の研究に見られ、日本では小此木・馬場 (1972) によって精力的な追試研究が行われた。以下に、Lerner

(1998)を参考にしつつ、継起分析を行う際の注意点をあげる。

①プロトコル全体、各図版、各反応についての評価を含むばかりでなく、あらゆる言動に表れるような検査態度や検査行動も含む。反応過程の最後にみられる伝達は、テスト状況に依存するからである。したがって、検査施行の記録を可能な限り逐語的に取るべきである。

②各カードの刺激特性を理解しておくこと。例えば、I、IV、V、VI図版は全体に知覚されやすいし、他の図版は断片的みられやすい。

③人格構造における退行的、進展的变化を観察するのに役立つ、これらの変化は、領域(location)、決定因(determinant)、内容(content)、形態水準(form level)、及びテスト態度という側面から見ることができる。

④継起分析は、このテストの理論だけでは不十分で、外部にある広範な人格理論や精神病理学を学ばなければならない。Lernerは精神分析理論にある精神病理学モデルを、伝統的な葛藤モデルと最近の発達停止あるいは構造欠損モデルの二つに分ける。葛藤モデルでは、葛藤の表れとその葛藤を解決しようと試みる方法や、その解決の成功や失敗の程度を観察するものである。これはいわば神経症をモデルとしている。発達停止あるいは構造欠損モデルは、コフートの自己心理学(Kohut, 1984; Lee & Martin, 1991; 中野, 2003)の影響がある。境界性、自己愛性の人格障害の治療論が1970年以後に進み、DSM-III(1980)の人格障害の分類以後、人格障害を対象にしたロールシャッハ研究が進んだ(中野, 1986)。

⑤「投影法」という用語にある「投影」は、自分の性質、感情、態度、経験、要求などを外界の人物や事物に帰属せしめる作用と広義に用いられ(Scachtel, 1966)、Freudによって発展した狭義の投影機制が見られる反応は、全体のなかでも少数である。Exner(1986)は投影が生じている可能性の高いのは、運動反応、修飾された反応(特殊スコア)、刺激を極端に歪めた知覚(形態水準がマイナス)であると指摘している。この意味で、

Rapaport(1968)のいう逸脱言語表現は見逃してはならない。

⑥妥当性の高い解釈ができるために筆者が考えていることは、最初のカードからできるだけ仮説を出していき、その仮説が後のカードで確認できるとき、その仮説は妥当性が高いというものである。仮説をつくるためには、被検者が口にしないことに目をつけることである(中野, 1993)。この点は、何を知覚したかだけをみる構造的アプローチと決定的に異なる。

三つの人格構造

Freud以後の急激な社会変化に伴い、古典的な神経が減少してさまざま人格障害が顕在化してきた。特に1970年以後の精神分析理論の発展に、Kohutの自己愛人格障害の研究と並んで、カーンバーグ(Kernberg, 1984)は境界性人格障害の研究で多大な貢献をした。従来の神経症圏と精神病圏の疾患の他に境界性の一群を位置づけるために、Kernbergは表3に示すように、同一性の統合度、防衛操作、現実検討という三つの基準から、人格構造(personality organization)という概念を作った。境界性人格構造(BPO)を他のものから鑑別するための手段としてロールシャッハ法が注目されたのは1980年以後である(Kwawer et al., 1980)。筆者も境界性人格障害をアセスメントするのにロールシャッハ法が有効であることを確認した(中野, 1985, 1988)。

継起分析を行う上で、小此木・馬場(1972)の『精神力動論』は有用であるが、人格障害の視点がなく、馬場(1983)は境界例のロールシャッハ研究別個発表している。そこで本論文では、病態水準を鑑別できるように、高次と低次の防衛機制にわけて扱う。

表3. 人格構造の鑑別 (Kernberg, 1984)

| 構造の基準 | 神経症性 (Neurotic) | 境界性 (Borderline) | 精神病性 (Psychotic) |
|-----------------------------------|---|---------------------------------------|--------------------------------------|
| 同一性の統合度 (Identity integration) | 自己表象と対象表象は明瞭に区別されている | | 自己対象と対象表象ははっきり区別されていないか、妄想的な同一性が存在する |
| | 統合された同一性：自己と他者の矛盾する側面が統合されて全体的にまとまった概念になっている | 同一性拡散：自己と他者の矛盾する側面がうまく統合されずに分離したままである | |
| 防衛操作 (Defensive operations) | 抑圧と高次の防衛：反動形成、隔離、打ち消し、合理化、知性化 | 主として分割と低次の防衛：原始的理想化、投影同一化、否認、万能感、脱価値化 | |
| | 防衛は患者を精神内界の葛藤から守る。解釈は機能を改善する | 防衛は患者を崩壊及び、自己-対象の融合から守る。解釈は退行をもたらす | |
| 現実検討 (Reality testing) | 現実検討能力は保たれている：自己と非自己との区別、知覚や刺激の源泉が精神内界か外界かを区別 | | 現実検討能力の喪失 |
| | 自己と他者を現実的に深く評価する能力が存在 | 現実との関係の中や、現実感覚の中で変化が起きる | |

高次の防衛解釈

高次の防衛機制は抑圧を中心としたもので、ヒステリー性格や強迫性格にみられる。防衛は実際にはさまざまな防衛機制と組み合わせさせて機能しており、防衛機制の分類に関しても研究者によって異なるが、ここでは主として小此木・馬場(1972)の研究成果を紹介する。以下のロールシャッハのスコアリングは片口法に基づく。

A. 回避・逃避を基本とした防衛機制

1. 抑圧 (repression)

抑圧は否定すべき欲求や罪悪感を引き起こすような内的な観念・思考・記憶に対して無意識のうちに忘れる、気づくまいとする機制である。

1) 抑圧が過剰な場合

①反応数Rが減少し、ショックもある。②反応領域：無難なところが選択される。③決定因：形態反応Fが増加し、色彩や運動反応は減少する。④コンテンツ・レンジCRは減少し、平凡な内容や動物反応Aが増加する。⑤陰影、色彩図版では、

反応時間が遅延し、形態質が低下し、反応不能をみせるか、不安を意識できない。⑥テスト態度：協力的ではあるが、抑制的、消極的で、言語表現が乏しい。

2) 抑圧が不全な場合

抑圧感情が高まり、それに対する防衛がみられる。①反応拒否が増加。②純粋形態反応Fが減ってCF, C, cFが共存するが、運動反応Mや形態色彩反応FCを欠く。③形態質：抑圧を修復しようとするために、形態質が変動する。④反応内容：不安反応(火、爆発、怪物、悪魔、血)が増える。⑤テスト態度：抑圧感情の表れ、誇張や否定のみられる。

2. 否定 (negation) 及び誇張 (exaggeration)

否定や誇張は抑圧が弱化したときに抑圧を回復する試みである。否定は一度意識しながら、その意識を否認する心理過程であり、誇張は否認する際に大きさに強調する。

1) 否定

①反応領域に表象できなかった領域を述べる(自己不確実感、攻撃性、恐怖感等の否定)。②

反応内容に「・・・に見えません」という否定の表現が認められる。

2) 誇張

意識化すると不快になるようなものを認めながら、一方でそれを否定する態度や言葉を誇張的に示す。

3. 否認 (denial)

否認は外界の不快・不安・恐怖からの回避である。抑圧が内なる感情に働くのに対して、否認は外の表象に対して働く。否認は外的現実に関わるので、現実検討機能が低下する。抑圧が発達する前の幼児的な防衛機制なので、低次の防衛機制でもふれる。

1) 抑圧と結合した消極的否認

①反応領域：不快を避け（無視）、不快でない普通部分反応Dを選択しやすい。②決定因：色彩・陰影反応は減少する。③反応内容：無難で平凡である。④テスト態度：消極的で、個人的表現が少ない

2) 誇張による否認

身ぶりを伴う、大げさな表現が多い。

3) 空想を通しての否認

万能感を高める空想を形成する。①反応内容は不快なものを好ましい、楽しいものとする。②大げさ、演技的傾向が加わる。

4. 隔離 (isolation)

隔離（分離）は、一定の関連や脈絡があるはずの観念と観念、観念と感情、特定の意識状態と他の意識状態など、両者の関連を絶つことで危険（不安、罪悪感、恥）を回避する。知性化や反動形成と結びついて、強迫性格者によく観察される。

1) 隔離が過剰で堅苦しい場合

①反応領域：特殊部分反応Ddや空白反応Sが増える。②決定因：形態反応率F%が増加、色彩や陰影反応は減少する。③形態質：一般に良好で、感情にまどわされず、客観的、論理的である。④内容：物体化された表象が増え、人間や動物も物体化されがちである。⑤テスト態度：忠実ではあ

るが、自発性は乏しく、感情閉鎖的である。

2) 隔離が不全な場合

①形態反応率F%が減り、色彩や陰影反応が増える。②形態質は低下する。③反応対象の細分化や物体化は不全である。④テスト態度は動揺しない。

B. 置き換えを基本とした防衛機制

置き換え（displacement）は、意識化すると危険や葛藤がおこるような欲動について起こる。その場合、置き換えられる対象や表象は意識に受け入れられやすいものが選ばれるが、欲動の性質や目標は不変で、対象や表象の移動だけが起こる。

1. 象徴化 (symbolization)

1) 比喩的象徴化

自己顕示欲や哲学的芸術的態度を強調する被検者にみられやすい。①決定因：形態反応率F%は減少。象徴的な反応（Csym）が増加。②反応内容：Abst, Art, (H)が増える。④テスト態度：主観的、一方的である。

2) 無意識的表象過程としての象徴化

この典型は夢の象徴化である。反応表象が何を象徴化しているかは、精神分析的な主題解釈（thematic analysis）を試みる必要がある（Schafer, 1954）。

2. 知性化 (intellectualization)

知性化は特定の欲動や感情を意識化するかわりに、論理的な思考過程、知識、客観的認識や観察に置き換える過程をいう。

1) 知性化が過剰な場合

①反応数が増えるか反応の質を高める。②知的野心が高く、全体反応Wが増加するが、DdやSも増える可能性がある。③一次的F（ΣF）や付加決定因が増加。④形態質は良好でCRも増加。⑤テスト態度：知的能力の検査の場とみなす。

2) 知性化が不安定な場合

隔離の不全を参照。

3. 合理化 (rationalization)

合理化は隔離が必ずしも十分でないために、感情や欲動を正当化する、自己中心的な努力をいう。

①自己の体験に基づく合理化：「子どもの頃見たことがある」「家にあるから」という表現が認められる。②論理的帰結を合理化：「これが頭、足とすれば、ここは当然手になる」というような表現がみられる。③テスト状況の故の合理化：「無理にこじつければ、何かに見なければいけないと思ったので」というような表現がみられる。

4. 昇華 (sublimation)

昇華は、衝動の対象や充足方法を社会的に適応性の高い、あるいは価値の高いものに置き換えること。防衛機制の全体的傾向を総合的に判断して評価する。

C. 逆転を基本とした防衛機制

1. 反動形成 (reaction formation) 及び打ち消し (undoing)

反動形成及び打ち消しは、不安、罪悪感、恐怖、不快がおこるような無意識的な欲動や感情の意識化を防ぐために、それと反対の態度や衝動を無意識的に強調する心的機制である。反動形成がその人物の全体的な態度によってあらわされるのに対して、打ち消しは個々の心理的な働きで、超自我感情(罪悪感、恥)が体験された時に、正反対の行為を試みることに。

1) 反動形成が過剰で堅苦しい場合

a) 従順さによる敵意の反動形成

①反応数Rが増加、特殊部分反応Ddが増加。②決定因：生の感情表出を回避するので、 ΣF (形態性の先行する決定因の総和)や純粹形態反応Fが増加し、色彩や陰影反応は減少し、Mも減少するか消極的なMになる。③反応表象：従順、無害、自己処罰的で、平凡反応Pが増加。④テスト態度：テストを処罰的な権威者とみなす。

b) 友好的な態度による敵意の反動形成

①Rを増やそうとすることはない。②感情表出

は活発ではあるが、統制をうけている(CF < FC)。

③反応表象は親しい、美しいもの、かわいらしいものが増える。④態度：テストへ協力的。

c) 尊大さによる依存欲求の反動形成

①Rは減少。②領域：WやDが増加し、プロットにないものを求める。③決定因：純粹形態反応Fが増え、情緒反応性を示唆するC、C'、cは減少、想像性や独創性を示唆するM、FM、FKも減少。④反応表象：AやPが増加。⑤態度：テストに否定的態度をとる。

d) 自己主張、競争による依存欲求の反動形成

①反応表象：強さ、自信、権力、自己顕示などを示唆する。②態度：テスト状況の中で主導権をとる。

e) 劣等感、自己不全感に対する反動形成

①態度：好意的、協力的、質問段階で自信ある態度が不安定になる。②色彩、陰影刺激の強い図版で急激に形態質が低下。③領域：Wが過剰。④反応表象：小さいもの、未熟なもの(虫、子供、動物の部分)が特徴。

2) 反動形成が不全な場合

①形態質が変動し、不良形態反応が増加。②決定因：C、C'、cが増えるが、色彩や陰影の用い方が不自然。③反応表象：敵意、不安、依存性、心細さが反映。④一つの反応の中に、欲動、罪悪感、不安などが混合する。⑤反応継起：正反対の表象が交代。⑥態度：感情や欲動の表現が修正される

低次の防衛解釈

A. 投影及び取り入れの防衛機制

1. 投影 (projection)

投影は、取り入れと対をなす。取り入れは合体、一体化の方向で働き、投影は否定、排除、逆転、対立の方向で働く。投影は、自己の内的な欲動や感情の中で受け入れがたいものを他者に属するものとし、それが自己に向かってくるものとして知覚する心理機制。

1) 隔離・合理づけと結合した投影

完全癖が強い者、感情閉鎖的な者、過度に潔癖、詮索的、確認癖のある強迫者、敏感者、統合失調型 (schizotypal) 性格に生じやすい。超自我不安を持ちやすく、自己を正当化する合理づけを試み、また罪悪感を投影して被害的になりやすい。①領域：警戒心、猜疑心に基つき、Dd,Sが増加。②決定因：Fが増加、時にMも増加し、色彩及び陰影反応は減少。③形態の指摘は一般に詳しく、無理なこじつけがみられる。

2) 妄想的投影 (paranoiac projection)

①運動反応の量と内容：MやFMが多すぎ (Mが5,6以上)、現実から遊離。Mの内容に敵意、被害的、恐ろしいものが多い。FMの内容もMと似る。②興味関心の対象が縮小。(H) , (A) , (Hd) , (Ad) が多いほど、現実から遊離、内閉的である。解剖反応が増えることもある (心気症的)。③一定の主題に指向する (被害・攻撃感情、自己処罰傾向、超自我恐怖など)。対人交流が一面的となりやすい。④外界に対する警戒・詮索と被害・攻撃的な投影が伴うと、プロットに見えないものまで表象化する。(例：「・・・が隠れている」) ⑤自我機能全体の病態化が進行すると、自我境界崩壊反応が生じる。「この怪物が今にも襲いかかってきそうだ」⑥態度：テスターを加害者・威嚇者とみて内心を見抜かれまいとする、テストの隠された意図を探る、自己の判断や観察の正しさを強調する。

3) 否認・空想化と結合した投影

願望に叶うように現実を作りかえる空想化が崩れ、否定すべき自己が意識化されそうになるが、あくまでも望ましい自己像を保とうとする願望から生まれる。有害なものは外から自分にくるもので、自分自身は無害・無罪という投影を行なう (欲動の主体を自己から外界に逆転する投影)。病態として、妄想的思考、軽躁者に生ずる被害念慮がある。

①領域：Wが増え、現実的な検討を避け、大雑把な直感的印象。②説明：主観、願望、空想が強調され、明細化が乏しく、形態質も低下。③決定

因：抑圧否認が弱化しているため、色彩反応 (CF,C'F) が増加し、誇張や比喩的象徴 (Csym) みられ、善悪の争いという形をとる。陰影反応 (材質感) は減少し、運動反応に作話的傾向を伴いやすい。④内容：特定の主題が強調される。否認されるべきもの (攻撃、罪悪感、自己不全感) と否認するものとしての自己像 (無害、強力、正しい、善良、明るい) とが交代したり、葛藤的に共存したりする。⑤態度：協力的かと思うと攻撃的、疑惑を抱くなど、不安定で変動する。

2. 取り入れ (introjection) 及び合体 (同一化)

取り入れは口愛的な活動から発しているが、主観的にはその対象と自己の合体 (incorporation) をもたらず。合体は、同一化の原型であり、同一化 (identification) は自己と対象の区別が確立した上で働く場合をいう。

1) テスト態度に示される同一化

①主導者への同一化：例「さあ次にいきましょう」②ルールの支持者への同一化：例「もっとゆっくり言いませんか」③評価者への同一化：自分の反応語に「これはなかなかよくできている」と反応。

2) 反応表象及びその主題に反映される同一化

どのような反応表象や主題が自我親和的か、自己像や理想像とみなしているかを分析する。

3) 不適応的な同一化

①大雑把で不注意な形態を指摘しながらその事実気づかず、自信のある満足気な態度を保っている場合、実際の自己以上に有能な人物像に同一化して安定を保っている。②テストを楽しみ遊戯のようにみなしたり、テスターを友だちのようにみなしたりする態度は、自己の現実を否認し、社会的役割関係から退行した同一化である。

B. 原始的防衛機制

抑圧を基盤とする防衛を高次元の防衛に対し、分割を基盤とする低次元のものを原始的防衛 (primitive defenses) という。Lernerらはこの防

衛操作を評価するために有用なスコアリング・システムを考案しているのので、以下に紹介する(Kwawer, J.S., et.al, 1980)。注意点としては、一般的にスコアの基本的単位は運動に関係なく人間の全体反応Hであること。例外としては、分割の指標で二つの反応が含まれる時は、一つのスコアが与えられ、投影同一化には人間部分反応Hdを含むことができる。また、時間的・空間的距離が「ない」という場合はプロットの属性に密着した反応であり、「ある」という場合は空想的である。

1. 分割 (splitting)

分割は、自己及び対象について、良い面と悪い面を別々に認知して、良い面が悪い面によって破壊されないようにする防衛である。したがって、強い両極性という観点から他者を知覚して表現する傾向に表れ、欲求挫折対満足、危害対優しさ、好意対敵意という形を取る。対象についての情緒的表現が両極化する(polarize)傾向が根底にある。分割(S)のスコアの例を以下に示す。

(A) 反応継起において、人間反応Hがある情緒的次元で述べられた後に、それに続く別のHが正反対の情緒で説明される。例：「拳銃をもった醜い犯罪者のように見える」のすぐ後に「頬を寄せ合い一緒に座っている男女」と続く。

(B) 一つのHの説明の中で、人間像の一部分が他の部分と正反対のように見える。例：「巨人。下の部分は危害を加えそうだけど、上半分は優しそうだ」

(C) 一つの反応の中に、二つの正反対の人間像が含まれる。例：「ふたりの人で、男性と女性。彼は卑劣で、彼女に向かって怒鳴っている。彼女は天使のような人で、それに耐えている」

(D) 潜在的に理想化された人間像に、一つ以上の特徴が加わり価値が損なわれるか、潜在的に脱価値化された人間像に価値を高める特徴が追加される場合。例：「頭のない天使」

2. 脱価値化 (devaluation)

脱価値化は、その人の内的、外的対象の重要な

価値を下げることで、羨望に対する防衛を行うばかりか、その対象と同じくらい自分もよいとする。脱価値化(DV)には、5ポイントの連続線上で評する。

(1) 人間性(humanness)の次元は保たれ、時間的・空間的に距離がなく、否定的ニュアンスがあっても社会的に容認できる範囲である。DV1の例：「争っている二人」「奇妙な服を着た少女」

(2) 人間性は保たれ、時間的・空間的な距離の有無にかかわらず、人間像は露骨で社会的に容認しがたい否定的な言葉が用いられている。身体の一部が欠けた人間像も含む。DV2の例：「病気にかかったアフリカの子ども」「排便している女性」「邪悪な顔つきの男性」「頭のないバラバラになった人」

(3) 人間性の次元は保たれているが、人間の形態知覚に歪曲がある。時間的・空間的な距離の有無にかかわらず、人間像が否定的に述べられていても社会的に容認できる範囲である。ここにはピエロ、妖精、未開人、魔女、悪魔、魔術者を含む。DV3の例：「悲しそうな顔つきのピエロ」「壺の上に立っている人食い」「悪い魔女」

(4) 人間性の次元は保たれているが、人間の形態知覚に歪曲がある。時間的・空間的な距離の有無にかかわらず、人間像は露骨で社会的に容認しがたい否定的な言葉が用いられている。この評定は(3)よりも、否定的な描写が激しい。DV4の例：「二人の邪悪な悪魔」「非常に恐ろしい二人の火星人」「不気味なクー・クラックス・クラン」

(5) 人間性の次元は失われ、時間的・空間的な距離の有無にかかわらず、人間像は中立的ないし否定的な言葉が用いられている。DV5の例：「衣服は着けているが、頭のないマネキン」「二人の人だが、宇宙から来た半分男性で、半分動物の人」「女性で胸があって、ハイヒールを履いていて、口は鳥のくちばし」

3. 理想化 (idealization)

理想化は、対象の好ましくないものを否認し、その人自身のリビドーあるいは万能感を投影する

ことで、破壊衝動や迫害不安を防衛する。理想化 (I) も 5 ポイントの連続線上で評定する。

(1) 人間性の次元は保たれ、時間的・空間的な距離がなく、人間像は肯定的に述べられているが、過度にへつらっているわけでない。I1 の例：「塀越しに見ている二人の上品な人」「幸福な笑みを浮かべている人」

(2) 人間性は保たれ、時間的・空間的な距離の有無にかかわらず、人間像は露骨で過度に肯定的な言葉が用いられている。I2 の例：「二人のハンサムは筋骨たくましいロシア人が、あの有名なダンスを踊っている」「おお天使なような姿。長い髪、なだらかに垂れるガウン、それに完璧にやさらかな顔つき」

(3) 人間性の次元は保たれているが、人間の形態知覚に歪曲がある。時間的・空間的な距離の有無にかかわらず、人間像は肯定的に述べられていても、適度な言葉で述べられている。この評定には名声や崇拜的、市民の指導者として力のある人、著名人を含む。I3 の例：「シャルル・ド・ゴール」「宇宙飛行士、月に着陸した一人」

(4) 人間性の次元は保たれているが、人間の形態知覚に歪曲がある。時間的・空間的な距離の有無にかかわらず、人間像は露骨で過度に肯定的な言葉が用いられている。この評定は(3)よりも肯定的描写が過度である。I4 の例：「戦士。それもただの戦士ではなく、最も背が高く、最も強く、最も勇敢な戦士」「ファン族のアッティラ、でもかつて見た中で最も大きな性器を持っている」

(5) 人間性の次元は失われているが、その同一性の価値を高めるような歪曲が見られる。時間的・空間的な距離の有無にかかわらず、人間像は中立的ないしは肯定的に述べられている。この評定には、有名人の彫像、巨人、スーパーマン、超自然的な力をもつ宇宙人、天使、偶像、非人間的な外見や力をもった半人間を含む。I5 の例：「ヴィクトリア女王の胸像」「他の惑星から来た強い生物がこれらの弱い生物を支配している」

4. 投影同一化 (projective identification)

投影同一化が本来の投影と異なるのは、対象に投影されるものが自我違和的なもの (ego alien) として体験されず、むしろ自己を対象に感情移入し (empathizes)、投影によって対象をコントロールしようとする。投影同一化 (PI) は三つの過程が作用している。すなわち、①外的対象の特性を無視して自己の部分を外在化すること、②自己と他者の境界を不鮮明にする能力、③他者をコントロールしたいという強い欲求である。その例を以下にあげる。

(A) 人間像を含む作話反応 (confabulation) で、形態水準はマイナスレベルで、連想的明細化 (associative elaboration) によって認知が過度に修飾され、プロット本来の特性が無視されて空想や情緒に取って代わられているもの。連想的明細化は攻撃的あるいは性的意味を伴う素材を含む。例：「巨大な男が私を捕まえようと近づいてくる。巨大な歯が見える。男は私を真っ直ぐにじっと見つめている。男の手が上がって、私を殴ろうとしているかのようだ。」

(B) 人間全体反応 H か人間部分反応 Hd で、反応領域が Dd で、決定因が形態陰影輪郭反応 (陰影が反応の輪郭となった反応) で、その人間像が攻撃的か、あるいは攻撃されてきたと述べているもの。例：「醜い顔」(IV 図版の内部)、「傷ついた男」(VI 図版の上部中央部分)

5. 否認 (denial)

否認 (DN) は、現実歪曲の程度で高水準から低水準まで、連続線上に配置される。外的現実を無視したり、歪曲したりすること。

(1) 高水準の否認 (DN 1)：現実歪曲は最小で、形態水準は良好で、いくつかの副次的な防衛からなり、一部は既述した。

(a) 否定 (negation)

(b) 知性化 (intellectualization)

(c) 過小視 (minimization)：欲動を最小化して、脅威でない形にする。人間像や動物像を戯画や漫画に変える反応を含む。例：「邪悪な人が落とす

影」「おかしな男、むしろ漫画に近い」

(d) 取り消し (repudiation) : 反応を取り消したり、以前に反応したものを否定したりする。

(2) 中度水準の否認 (DV 2) : 形態水準が良好な反応を含むが、反応の内容に、情緒的、論理的、現実的にみて根本的な矛盾がある。例：「セクシーなサンタクロース」「喧嘩をしている二人の厄僧」「読書をしながら眠っている男」

(3) 低次水準の否認 (DV 3) : 具体的にないものを付加することや、プロットの特性を考慮し損なうことによって、容認しうる反応が容認しがたい反応になってしまうもの。この水準にも知覚対象に対して矛盾した説明をおこなう反応が含まれる。例：「二人の人、でも彼らの上半身は女性で、下半身は男性。それぞれに乳房とペニスがある」「人、でも口の代わりに鳥のくちばしがある」「自分の巨大な尾の上に座っている人」

自己愛のロールシャッハ所見

境界性人格障害の防衛（分割など）は自己愛性人格障害の防衛（理想化、万能感など）とは区別される。自己愛のロールシャッハ法による実証的研究は1980年の後半になって現れてきた（Lerner, H. D. et al, 1988）。ここでは、性格構造、防衛構造、対象関係様式に焦点が当てられて、自己愛性人格障害の核心的特徴を抽出しようとしている（Lerner, P, 1998）。

(1) 自己没頭 (self-absorption) : Exner (2000) は反射反応 (reflection) とペア反応 (pair) と総反応数との比率を自己中心性指標として抽出し、自尊心の程度をみている。Lerner, H. らも鏡映反応 (mirror) と反射反応は過剰な自己没頭を示すと考えている。

(2) 自己万能感 : 称賛を求めて苛立つ結果、心理検査の仕組みを攻撃することがある。検査の体験を分かち合うのではなく、検査者をひきつけ、王、女神、神殿、勲章、紋章、王冠のような自己誇張の知覚が多い。

(3) 抑うつ : 空虚感や傷つきやすい自己知覚が

反映される。自己愛損傷としては、「傷ついた羽の蝶々」「疲れ切って濡れたガ」などの内容にみられる。また、空虚さは、反応が乏しくなり、空白領域に敏感になる。

(4) 対象関係様式 : 自己愛的対象関係では、対象は自己を映し返す自己の延長とみなすことから、人間運動反応が以下の特徴をもつ。①過度の確信をもって反応する。②原因となった行動とその結果は、見た目よりも作画的である。③知覚された人物に強い没頭と熱中がある。④被検者は自分自身が体験しているように、その人物像に自己を投入している。

おわりに

Rorschachの死後、ロールシャッハ研究の発展には二つの大きなピークがある。一つは1950代で、多くの学派が競って基礎研究をした時代である。この時代の観点は、行動主義的な立場から精神分析的立場まで幅広い。これは、Rorschach自身が両方の視点をもっていたからであろう。もう一つのピークは1980年代以後にみられる、ロールシャッハ法による人格障害研究である。筆者もこの領域に関心を寄せてきた一人である。当時、エクスナー法はまだ日本に入ってきていなかったので、片口法から勉強したが、その後、小此木・馬場の『精神力動論』で防衛解釈に出会い、ロールシャッハ法のおもしろさを知った。

このたび、この小論を著わすことを思い立ったのは、Lerner, P. の『ロールシャッハ法と精神分析視点』に刺激されたからである。これはロールシャッハ法における精神分析的アプローチに関する本邦初の本格的な翻訳である。これを読んだ方はおわかりであろうが、精神分析的アプローチを取ろうとすれば、背景となる精神分析理論の研究を欠かせないということである。それにしてもロールシャッハ法は不思議なツールである。質問紙法と違って、ロールシャッハ法はこれを使う人の目的に幾重にも合わせられるからである。

文 献

- 1) American Psychiatric Association (1980) : DSM-III Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (Third Edition) 高橋三郎他訳 (1982) : DSM-III 精神障害の分類と手引き 医学書院
- 2) 馬場禮子 (編) (1983) : 境界例 ロールシャッハテストと精神療法 岩崎学術出版
- 3) 馬場禮子 (1999) : 改訂 ロールシャッハ法と精神分析—継起分析入門 岩崎学術出版
- 4) Bash, K.W. (1965) : ロールシャッハ 精神医学研究. 空井・鈴木訳 (1986), みすず書房
- 5) Bleuler, E. : Dementia Praecox oder Gruppe der Schizophrenien. 飯田・下坂・保崎・安永 (訳) (1974) : 早発性痴呆または精神分裂病群 医学書院
- 6) Ellenberger, H.F., 中井久夫 (訳) (1981) : エステイヌス・ケルナーからヘルマン・ロールシャッハへ—インクプロットの歴史. ロールシャッハ研究, 23, 1-8.
- 7) Exner, J.E. (1969) : The Rorschach systems. 本明寛(監訳) (1972) : ロールシャッハ・テスト—分析と解釈の基本 実務教育出版
- 8) Exner, J.E. (1991) : The Rorschach : A Comprehensive System, Volume 2. 藤岡・中村・佐藤・寺村 (訳) (1994) : エクスナー法 ロールシャッハ解釈の基礎 岩崎学術出版
- 9) Exner, J.E. (2000) : A primer for Rorschach Interpretation. 中村紀子・野田昌道 (監訳) (2002) : ロールシャッハの解釈 金剛出版
- 10) Exner, J.E. (2001) : A Rorschach Workbook for the Comprehensive System (Fifth Edition). 中村・西尾・津川 (監訳) : ロールシャッハ・テスト ワークブック (第5版) 金剛出版
- 11) Exner, J.E. (2003) : ロールシャッハ・テストの起源と黎明期の発展. 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌, 7(1), 4-7.
- 12) Freud, S. (1900) : Traumdeutung. 高橋義孝 (訳) (1968) : 夢判断 フロイト著作集2 人文書院
- 13) Klopfer, B., Davidson, H.H. (1962) : The Rorschach Technique : An Introductory Manual. 河合隼雄 (訳) (1964) : ロールシャッハ・テクニック入門 ダイアモンド社
- 14) 笠井さつき、津川律子、中野明德 (1998) : 包括システムによるロールシャッハ・テストにおける精神分裂病指標 (SCZI) の分析—精神分裂病患者を中心に. 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌, 2(1), 52-59.
- 15) 片口安史 (1987) : 改訂 新・心理診断法 金子書房
- 16) Kernberg, O.F. (1984) : Severe Personality Disorders : Psychotherapeutic Strategies. New Haven : Yale University Press. 西園昌久 (監訳) (1996) : 重症パーソナリティ障害—精神療法的方略 岩崎学術出版社
- 17) Kohut, H. (1984) : How Does Analysis Cure? Chicago : University of Chicago Press. 水野信義・笠原嘉 (監訳) (1995) : 自己の治癒 みすず書房
- 18) Kwapler, J.S., Lerner, H.D., Lerner, P.M., & Sugarman, A. (1980) : Borderline Phenomena and the Rorschach Test. New York : International University Press.
- 19) Lee, R.R., Martin, J.C. (1991) : Psychotherapy after Kohut. 竹友安彦・堀史朗 (監訳) (1993) : 自己心理学精神療法 : コフォート以前からコフォート以後へ 岩崎学術出版社
- 20) Lerner, H. & Lerner, P. (ed) (1988) : Primitive Mental States and the Rorschach. Madison : International Universities Press.
- 21) Lerner, P. (1998) : Psychoanalytic Perspectives on the Rorschach. Hillsdale, NJ : The Analytic Press. 溝口純二・菊池道子 (監訳) (2002, 2003) : ロールシャッハ法と精神分析的視点 (上, 下) 金剛出版
- 22) 中井久夫 (1997) : アドリアネからの糸 みすず書房
- 23) 中野明德 (1985) : 投影法テストからみた wrist cutting syndrome—境界型人格障害 (DSM-III) の2例. 臨床精神医学, 14 (7), 1053-1064.
- 24) 中野明德 (1986) : Personality障害の心理検査—ロールシャッハ・テストを中心にして. 臨床精神医学, 15(2), 203-209.
- 25) 中野明德 (1988) : 人格障害のパーソナリティ・アセスメント—境界型人格障害のロールシャッハ・テストを中心に. 臨床精神医学, 17 (1), 27-34.
- 26) 中野明德 (1993) : 心理テストをどのように利用するか. 霜山徳爾監修 心理療法を学ぶ 有斐閣選書 pp131-146

- 27) 中野明德 (2003) : 子どもの問題行動と自己愛— Kohut H.の視点から. 福島大学教育学部論集 (教育・心理部門) 75、23-36.
- 28) 小此木啓吾・馬場禮子 (1972) : 精神力動論—ロールシャッハ解釈と自我心理学の統合 医学書院 (1989、金子書房から刊行)
- 29) Piotrowski, Z. A. (1957) : Perceptanalysis. 上芝功博 (訳) (1980) : 知覚分析 新曜社
- 30) 津川律子、浜田さつき、中野明德 (1997) : ロールシャッハ・テストの包括的システムにおけるうつ病指標および対処力不全指標の分析—大うつ病を対象にして. 心理臨床学研究、15 (4)、361-370.
- 31) Rapaport, Gill, Shafer (1968) : Diagnostic psychological testing. New York : International Universities Press.
- 32) Rorschach, H. (1921) : Psychodiagnostik. 鈴木睦夫 (訳) (1998) : 新・完訳 精神診断学 金子書房
- 33) Schachtel, E. G. (1966) : Experiential Foundations of Rorschach Test. 空井健三・上芝功博 (訳) (1975) : ロールシャッハ・テストの体験的基礎 みすず書房
- 34) Schafer, R (1954) : Psychoanalytic Interpretation in Rorschach testing. New York : Grune & Stratton.

The Rorschach and Psychoanalysis : The Sequence Analysis and Assessment of Defense

Akinori NAKANO

The Rorschach test is the most famous projective method developed by Hermann Rorschach in 1921 who was a psychiatrist at a mental hospital in Switzerland. He developed the test to differentiate schizophrenias from other psychoses in terms of perception. He was also interested in psychoanalysis, but unfortunately he died in 37 years old. After his death, several Rorschach systems have developed in America. The Rorschach method contains two approaches; an empirical one, and a psychoanalytical one that is based on the dream theory of Freud, S.

The psychoanalytical approach is idiographic and experiential one in contrast to the structural approach showed in the Exner's system. The sequence analysis is one of psychoanalytical approach to understand personalities dynamically. It is necessary to learn the assessment of defense for analyzing the sequence of Rorschach responses. In this paper the assessment of defense is showed in detail which is very useful to interpret both the conscious and unconscious process and the personality organization.